

地域から社会を見つめる目を養うことを目指した授業づくり

荒井 眞一

はじめに

実践報告に先立って、葛保先生より『総合』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』と『生活科』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』との、本分科会における継続的な研究課題がしめされた。

『総合』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』に対して求められる事柄は、「教えたいことと学びたいことの統一」「目標設定における知識・技能・情意の統一」「子どもにどのような力が付いたかということに対する検討」の三点である。また、『生活科』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』に対して求められる事柄は、「体験によって学ばれたことの、子どもの具体

的な学習成果からの検証」である。

以上のような継続的な課題設定の下で目指すべき実践の方向性は、社会をより深く見つめる目を養っていけるような学びの創造である。このような目を養うことを通して、地域という点から、より広い範囲への視野の拡大を図る。

このための方法の一つとして、本分科会においては、生産や労働における人々のありようについて具体的にとらえるような実践の方向性を視野に入れつつも、多様な実践から成果を吸収することをめざしている。

一 実践報告

1 滝の上小学校の総合学科・生活科

夕張市立滝の上小学校 齋藤 秀昭

齋藤報告の冒頭では、総合学習が追及するべき本来の学びの姿とは、系統性を配慮しながらも学びの主体である子どもへの思い・疑問・興味・関心の延長上に学習内容を設定することであるとの提起がなされた。そして報告者は、子どもへの思い・疑問・興味・関心は、生活の場の中に存在するのではないかと述べた。それゆえ、総合学習に地域の素材を位置づけることは、地域の人々に直接話を聞いたり質問し

たりするなどの関わりを通じて、より現実在即した学びが展開される可能性を有すると同時に、地域自体を知ることから地域的問題・国民的課題・人類的課題との関連で学びを広げ、矛盾や対立ある複雑な社会現実を目を向けることを可能にするという。

前段で述べたような問題提起を踏まえて報告者は、総合学習実践の概要を①畑の学習（勤労・生産学習）、②故郷学習（地域の歴史の掘り起し）、③命の学習、④その他、の四点として系統立てた。参加者からは、鉄道などという具体例から様々な内容を掘り下げることが可能になるのではないかという実践の継続可能性についての意見が出された。また他の参加者からは、一連の学びの体系性に対する驚きが表明された。この体系性のもとで、現在の農業問題であるT・P・Pなどにつながるものとの評価もなされた。夕張には、「ものづくりの授業」の系譜が連続と存在する。齋藤報告もまた、このような系譜に位置付けられうる実践報告であったように思われる。

2 もの作りを通して地域を知る／酪農・牛乳・食文化／

釧路市立徹別小学校 淀野 耕太郎

淀野報告は、酪農の発展を通して豊かな生活の実現を願う報告者による、乳製品を中心としたものづくり実践の記

録であった。別海町という酪農地帯の子どもたちに、牛乳と乳製品を結びつけるきっかけを増やすことよって牛乳によってもたらされる恵みを実感させ、酪農を誇りに思う気持ちを抱いてもらうことが、実践における目標とされた。

前段における目標を達成するため、総合的な学習の「地域を知る」単元、学級会のお誕生会、社会科の地域の産業などが合科的に扱われ、児童の誕生日ごとに「牛乳を使つたもの作り」が行われた。実際に作られたものは、インスタントのプリンや杏仁豆腐、牛乳豆腐、アイスクリーム、バター、ヨーグルト、ソーセージ、味噌など多様なものであった。

多くの実践を経て子どもたちは、農業から計り知れない恵みもたらされていることを知った。特に酪農地帯にあつては、牛乳によつて食生活が豊かになっていることが非常に重要な意味を持つ。今後も実践を継続し、子どもたちが酪農に対して誇りを持つようになっていく様子がより明らかにされることが、参加者全員から求められた。

3 学校のへや

日高町立里平小学校 岡野 正丸

岡野報告は、報告者の前任校であるえりも町立笛舞小学校における生活科実践の記録である。この実践において報

告者は、指導的な立場にある報告者が若い教員とともに行える複式学級における授業という点を念頭に置いていた。

報告者の実践に対する考えの中核には「労働」と「生産」という2点が位置づいている。特定された「場・空間」にある「モノ」は偶然性を含みつつもそこにいる「存在」である「ヒト」と必然的に結びついており、その「モノ」と「ヒト」の関係を通してことがらである「コト」を見出すことができるという。このような基本的な考えを実践という形とするために報告者が設定した実践の場が「学校のへや」であった。

児童に対しては、へやにある「モノ」は「誰が使うか」「どのように使うか」「なぜそこにあるのか」を問うことと合わせて、そこでの発見からそこにいる「ヒト」の労働の一端を学び取ってもらうことを求めた。

個人情報とのかかわりがあるため細部における実践の様子を述べることはできないが、子どもたちがそれぞれの「学校のへや」において主体的な追及を行った様子が報告から明らかにされた。若い教員を導きながら子どもたちの積極的な追及を組織した報告者の力量に対しては、参加者全員から驚嘆の声が上がった。今回の実践における子どもたちによる認識形成を、上学年においてより深化させうる実践の方向性という、カリキュラム構成にかかわる提言が次回

以降報告者よりなされることが強く望まれる。

4 地域の人から学ぶ

江差町立江差北中学校 石橋 英敏

石橋報告は、人と関わらせることを目標に地域の人から講話をしてもらい、それら講話を踏まえて他教科との接続方法に着いて模索を行った実践の経過であった。報告者によれば、報告者の勤務する檜山地域には「民衆の生活や、その生活を取り囲む「自然や労働(産業)」を感じ取れる「地域」が残っているという。そしてこの地域では、その「地域」のなかいある「ホンモノ」との出会いを求める積極的な実践が繰り返られてきた。

石橋報告においては、地域在住の農家の方を学校に呼び、その半生を述べていただく中から地域における農業への希望について、子どもたちに訴えかけていただいた。子どもたちの感想からは、農業という労働の大変さに対する理解を踏まえた上での農業に対する希望を述べる言葉が多数寄せられていた。

石橋報告に対して、聴衆からは「人を学校に呼ぶことは大事だが、こちらから伺う必要はないのか」との質問が寄せられた。このような質疑応答を起点として、教師の外へ向けての直接的なかわりの必要性に対する共通理解が、

参加者相互によってなされた。

5 交通研究会の活動記録(新聞を利用して)

北海道白樺高等養護学校 亀井 清隆

亀井報告は、年間十回、金曜日の五、六校時に総合学習という位置づけのもとで行われている全校活動における実践に関するものであった。実践名にある交通研究会は、十組織ある文科系グループのうちの一つである。報告者が顧問を務める交通研究会は、五名という少数の生徒に対して報告者を含む三名の教員が顧問を務め、分厚い指導体制のもとで意欲的な実践が行われた。

報告者の勤務校は知的障害字が通う学校であるが、教員の提供する数々の教材に対して、活発な活動を行ったことが報告資料から十分に感じられるものであった。これら生徒たちの活発な活動において重要な要因をなしたと思われるのは、報告者自身のきわめて豊富な鉄道知識と、その知識を裏付ける膨大な量の鉄道関係資料であった。新聞を主たる教材とはしつつも、記事の内容を様々に関連付ける指導者の豊富な知識・資料によって実践は明白に質の高いものとなっている。教育内容研究の重要性が実践報告から示唆される。

参加者からは、時刻表を読めるようにするといった目標

設定が可能か否かという質問が出された。参加者から寄せられた質問もまた、教育内容を基盤とした目標設定のありよう如何を問うものであった。次年度以降における継続的な報告が強く望まれる。

6 教育研究集会への参加による共同的学びの実現を

ねらいとした教員養成系大学における授業実践

北海道文教大学 荒井 眞一

荒井報告は、北海道教育大学札幌校学生による合同教研への参加と、学生の見聞した実践に対する質疑応答を踏まえた認識形成のありように対する報告であった。報告者によれば、毎年参加する合同教研で見聞する有益な実践の工ツセンスを大学の教職課程において実現するための方法として、今回の授業実践を行ったという。学生による報告やレポートを多数含んだ報告資料からは、さまざまな実践から、講義では学びえない事柄を知った学生の新鮮な驚きや、実践に対する学生相互の質疑応答の様子が察せられた。参加者からは、報告資料中に学生や子どもたちの変容の様をとらえ検討の材料とすることの重要性が指摘された。また、北海道独自ともいえる研究集会の有する積極的意義をより広範囲に知らせるための方法を検討することの必要性も提起された。

二 総括

昨年度は実践報告数が九本となり二桁に迫る数となったが、今年度は若干減少し六本の報告であった。しかし、多年にわたる実践の蓄積を有する参加者たちの意識は高く、分科会における質疑応答にも活気がみなぎっていた。

昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年来の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。また、報告者の勤務地は各地に及び、各々の地域の実情を踏まえた報告はすべてが個性的なものであった。

最終での総括討論の中で薦保先生から、北海道から全国へ向けて理論的な提言を行った山下國幸の社会認識形成論を踏まえることの重要性が指摘された。今回報告された実践の多くは、かつて山下が述べたような実践に基づいた理論的提言を目指すに足るものと思われる。今後も継続的な意見交換の積み重ねの中から抽象的な事柄を抜き出し、理論形成への足場とすることが、分科会としての主要な課題となるように思われる。

(北海道文教大学)